弾んだ天使と沈んだ天使

高　坂　健　次

自宅のドローアーの上に最近一枚の写真が増えた。若き同僚Y氏の一歳になったばかりの一粒種M君を私の妻が抱っこしている写真である。その写真を撮ったNさんが、大きく引き伸ばして送ってくれた。M君の瞳はこれまで二度しか逢ったことのない私の妻、母親でもない女性に抱かれて微塵の不安も感じていない。カメラに向かって興味津々である。右手を妻の左腕に軽くのせ左手は首に回していて見えない。目はまーるくまっすぐ前を見据えている。口元は小さく「アッ！」か「ン？」か「オッ！」と言っているように見え、まるで声が聞こえてくるようだ。

それにひきかえフォトジャーナリズム誌DAYS JAPANの3月号の表紙を飾っている姉妹の目は不安に怯え、沈んでいる。アゼルバイジャンからのアルメニア難民の姉妹の写真だという。寒さのなか家の中でゴミを燃やして暖をとるため、体中煤で真っ黒になってしまっている。姉妹寄り添っていてさえなお不安げである。姉に背負われた妹も姉も大きく目を見開いているが、見ているところは別々で、虚ろに見える。言いたいことはたくさんあるのかもしれないが、妹は口を閉じ、姉はかすかに開いてはいるが、声は聞こえてこない。

上の二つの世界の子どもの一方は幸福そのものであり、他方は不幸を背負っている。子どもが幸せな社会（家族、地域、クニ）は幸福であり、子どもが不幸せな社会は不幸だ、ととりあえずは言えそうだ。むろん全球的に見れば、ある社会の子どもの幸せと別の社会の子どもの不幸せとがどこかでつながっていることもあるだろう。グローバル化といわれる現象の一端がそこにある。生まれてきた子どもの責任では明らかにないけれども。

表情の差は社会環境の違いを表象している。しかし人間の気高さとなると環境によってすべて決まるわけではないだろう。かつてベルギー王立美術館でブリューゲル父が「ヨハネの黙示録」に基づいて描いたという「反逆天使の墜落」（1562）を見た。金褐色の鎧を身にまとった大天使ミカエルが、神に背いた堕天使を天国から追放している。環境に恵まれていなくても気高くはありうるだろう。先の姉妹も沈んではいるが、私の目には気高く映る。考えてみれば「堕天使」はどこにでもいるし、容易に自分の懐に潜入してきそうだ。自戒・他戒するほかはない。

（社会学部教授・学部長）